

S.G Report

No.3

水俣フィールドトリップ

日 時：平成27年6月2日（火）本校発、水俣へ

参加者：SGコース85名

引率者：本校教諭（重信、岩木）

目 的：（1）熊本県の環境課題である水俣病の歴史を持ち、全国屈指の環境先進都市である水俣で、環境問題への取り組みを学ぶ

（2）町づくりについて諸講師との意見交換を行うことにより、今後の課題研究への意識を高める

こんな事をしました!!

11:00～ 水俣資料館他

車内では、水俣病や車窓から見える地域に関する話を聞きました。水俣到着後はまず、水俣資料館を見学し、その後、親水護岸や患者が多く発生した地域である坪段・茂道を見学しました。



13:00～ 田中商店

昼食後、空き缶、空き瓶のリユース事業に取り組む田中商店を見学しました。



14:30～

もやい館にて講演

田端 和雄様（JA）、杉本 肇様（語り部）より、食の安全への取り組み、当時の水俣病を取り巻く状況等に関する講話を聞きました。



生徒の感想（抜粋・おおむね原文のまま）

実際に見てきた水俣の海はきれいで、汚染があったことが嘘のようだった。自然豊かで穏やかなこの場所で水俣病が発生したことはこれからも忘れてはいけないし、伝えていくべきだと思う。水俣の人々は一人ひとりが環境のことを考え、自分でできることから一歩ずつ未来のためへと動いているということを私は自分の目と耳で感じた。

水俣病の現実は信じられないほど残酷であり、特に差別がつらかったのだと聞いた。なぜ差別をするのだろうと思ったが、実際に自分が正しい知識のないまま当時の水俣にいたら同じ対応をとってしまうのだろう。正しい知識を知ることがどれだけ大切か、自分なりにこれから様々な場面で多くの人に伝えていきたい。そして、自分のため、地球のため、大切な人たちのために環境についてよく考え直し、身の回りの小さいことから変えていこうと思った。「人様は変えられんから、自分が変わるしかない。」という講師の杉本さんの言葉を忘れず、大切にしていこうと思った。

今回の研修では、水俣を実際に訪れ、資料館に行き、講話を聴いたことで、水俣病が起った過去を深く知り、過去を未来に活かしていくという考えを学ぶことができた。水俣病は、チッソという会社が、DOPという製品を作るための原料のアセトアルデヒトを作る際に発生するメチル水銀が原因で引き起こされた。チッソは当時大企業で、水俣に住む人々の働く場となり、地域経済を活発にしており水俣にとっても重要な企業であったと聞いた。だから、水俣病が発見された当初は、患者の家族であってもチッソをかばう人も多かったという。

研修では、田中商店の工場を見学した。そこには、九州のみならず関東、関西からも一升瓶が集まり、Rびん（再利用可能なびん）の使用を推進していた。また田中商店は、全国でも有名な水俣の22種類分別にも協力し、地域の小学校の地面の塗装を瓶の再利用品にするなどの取り組みも行っている。

私は、チッソと田中商店の話を聞き、共通点と相違点があると思った。まず、共通点は水俣の住民の生活に密着していることだ。上述したように、チッソは働く場となり、田中商店は毎月の資源ゴミの回収の中心となっている。そして、相違点は企業としての取り組みが環境に配慮したものであったかどうかである。窒素は高度経済成長の特徴でもある、工業の発展を第一とする考えのために、自然環境を大きく破壊してしまった。しかし、田中商店はむしろできる限り資源を循環させ、自然に配慮する姿勢でびんのリユースを進めている。その取り組みが、水俣の環境への関心の向上にもつながっていると思う。

このように、地域の環境問題と地域の企業の関係は深く、それは地域住民の考えによってもかわっていくことである。チッソの責任であるとわかった時点で、水俣の人々がもっと強く反対していたならば、国や県の対応はまた違っていたかもしれない。だから、私は地域の企業や住民の姿勢によって、産業を盛んにしつつ、自然保全も進めていくことは実践可能であると、今回の研修で分かった。ただ、そのような好循環の生まれている地域はまだ少ないと思う。それはなぜなのか、またその好循環を根付かせるためにはどうしたらよいのか、という疑問についてこれから調べていきたいと思う。